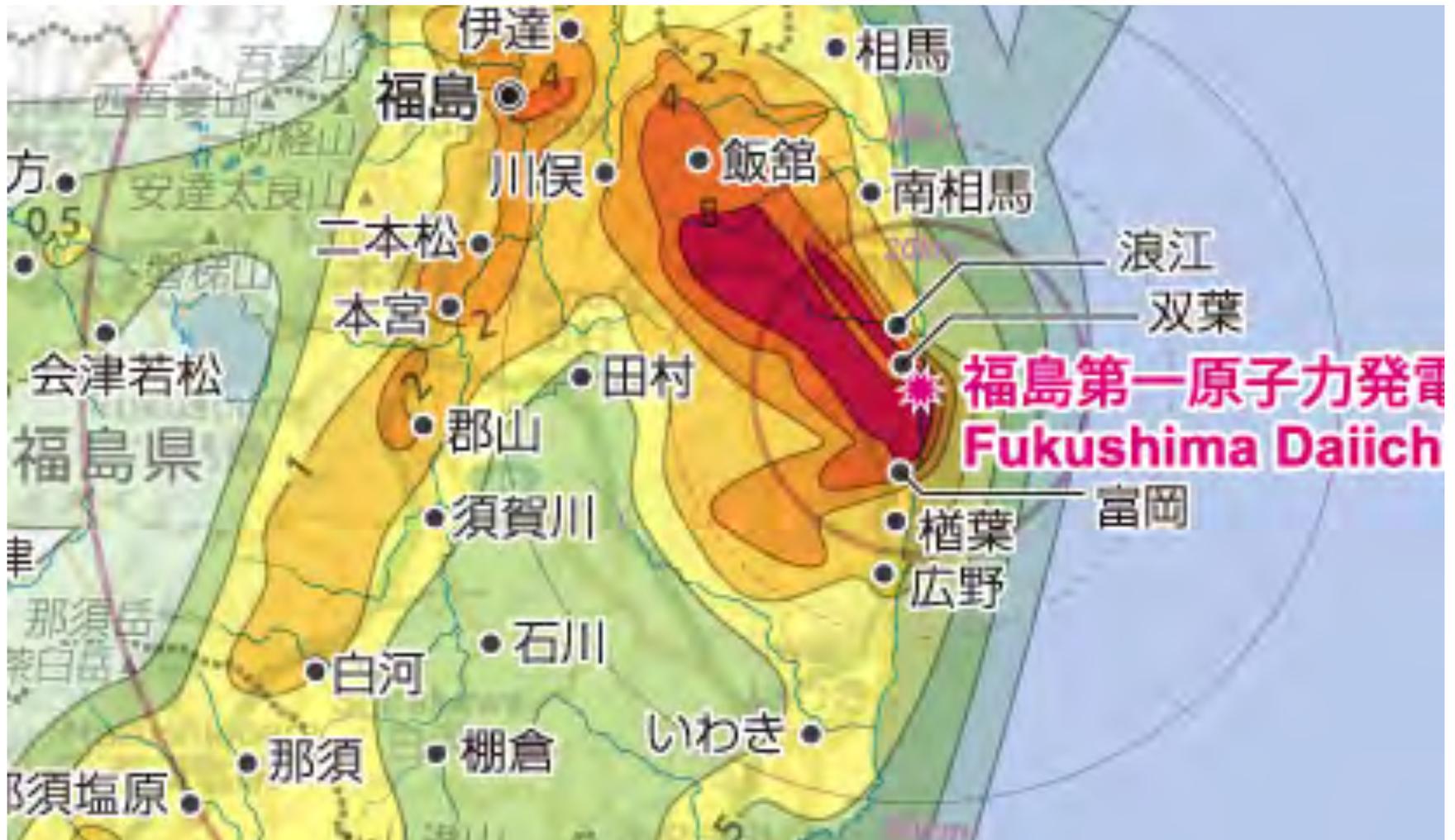


原発災害からの復興を目指して

福島県浪江町の場合

放射能の流れた方向



東西に長い浪江町

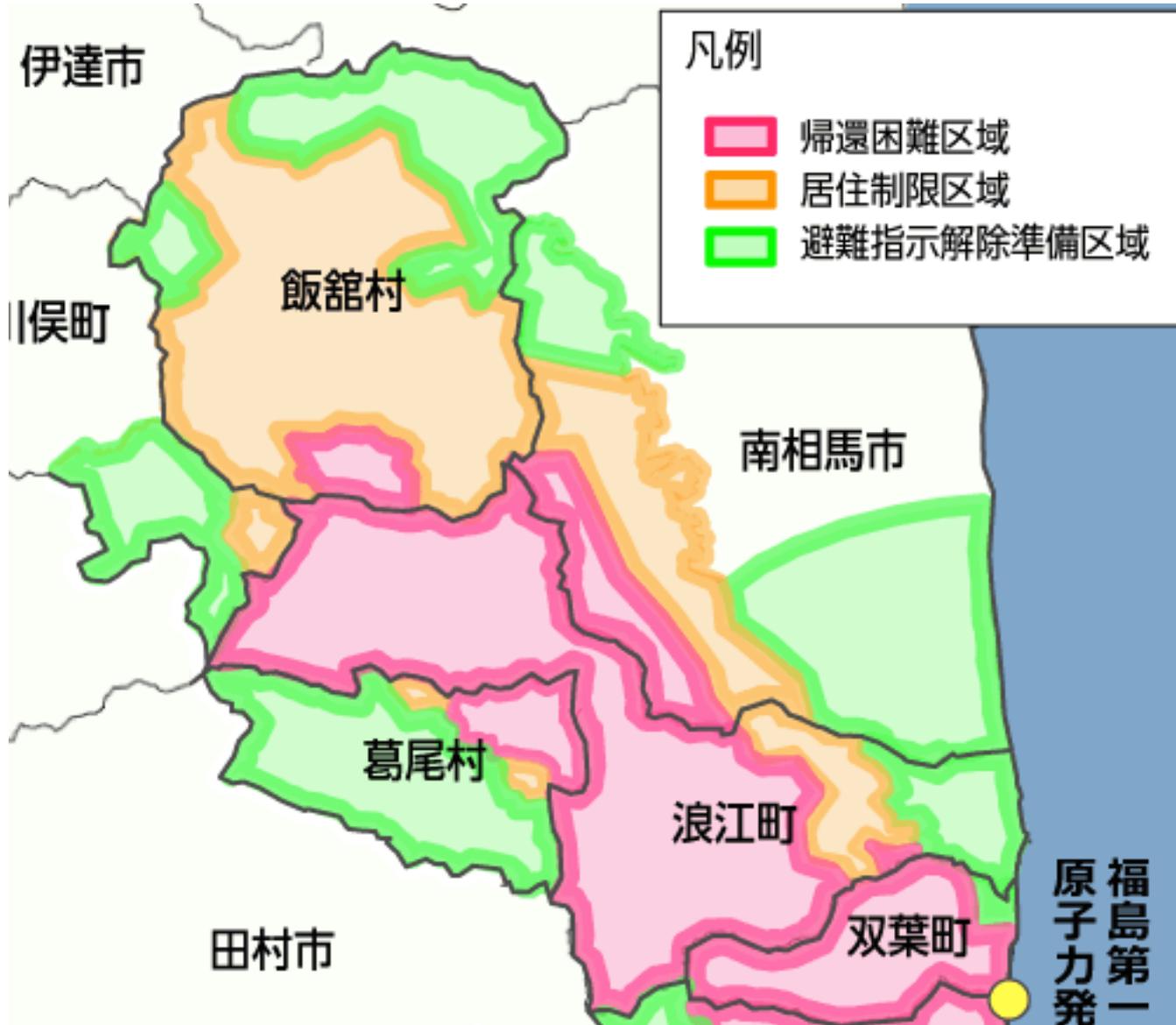


浪江町の被害状況

- 人口約 21000人
- 震災による死者 182名
- 震災関連死 350名 (2015.4現在)
- 震災後になくなった方が多い。



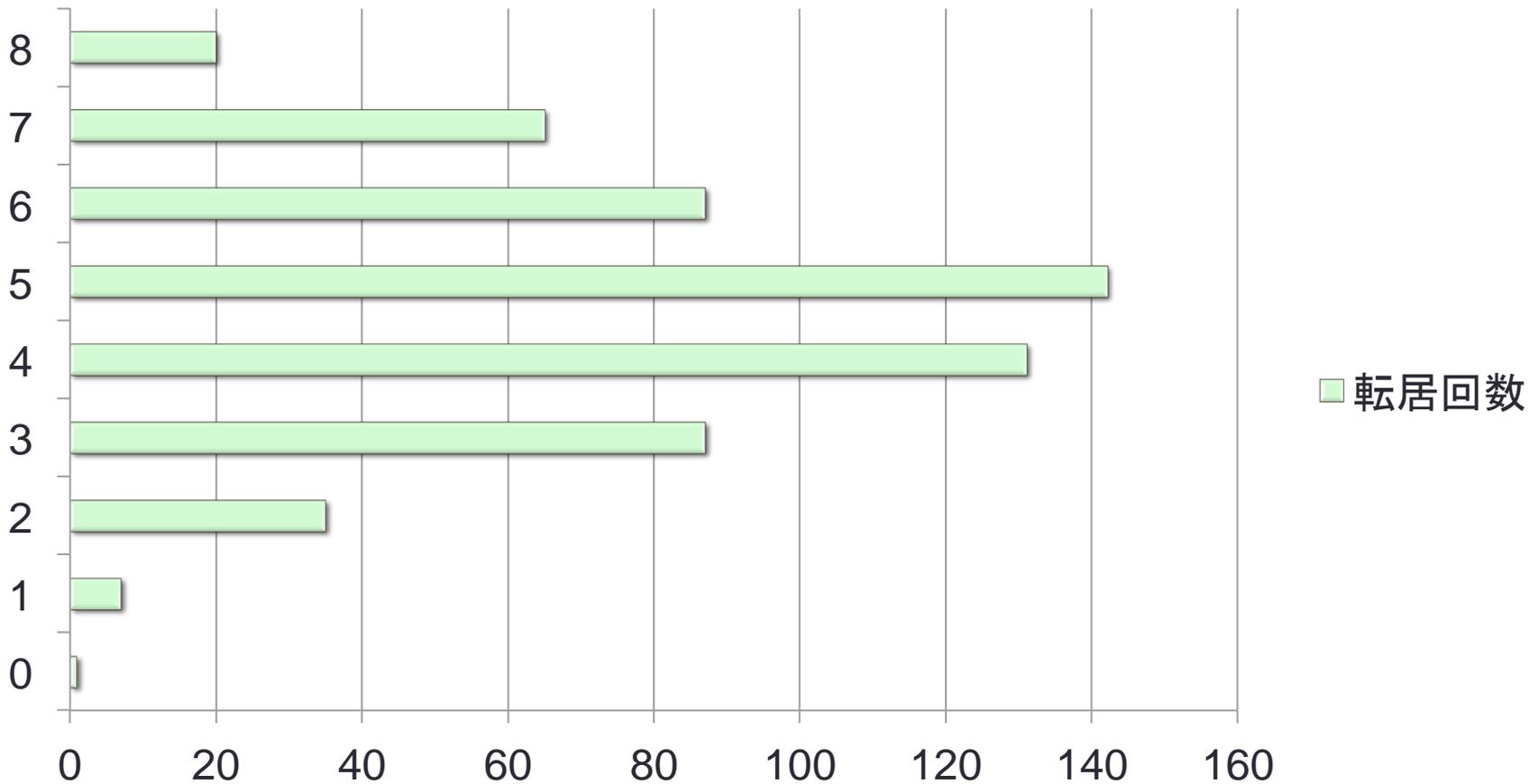
水田恵三



* 放射線の年間積算線量が20ミリシーベルトを超えるおそれがあり、引き続き避難の継続を求める地域。

被災後の転居回数 見えないものへの恐怖との戦い

転居回数



避難状況(平成27年4月現在)

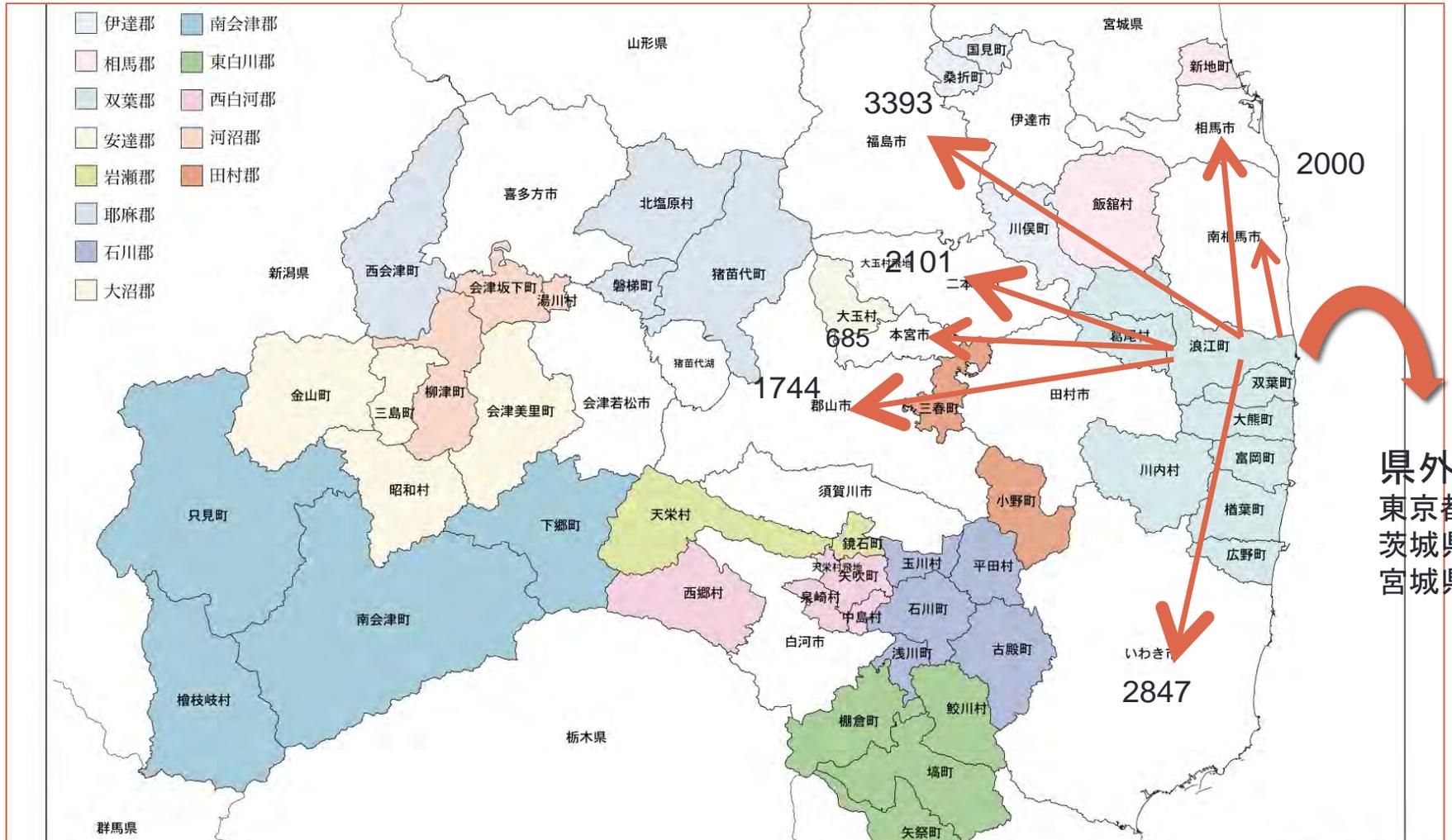
県	人数(人)
福島県	14605
茨城県	993
東京都	921
宮城県	708

県内避難状況

市	人数
福島市	3393
いわき市	2847
二本松市	2101
郡山市	1744
南相馬市	1315

浪江町民避難状況

県外 6415 県内 14605



調査の概要

- ☆調査の目的
 - 避難住民の現状を伺い、今後の支援の資料とする
- ☆調査内容
 - 心の健康
 - 被災状況、居住形態など
 - お困りのことなど
- ☆調査方法
 - 2014年3月下旬から4月下旬
 - 仮設住宅、借り上げ住宅、県外避難者など1050配布、
 - 603部回収率57.4%)

困っていること／不満に感じていること

- ・精神的苦痛
- ・心身の悪化(への懸念)
- ・寂しさ
- ・怒り

- ・震災前の生活(思慕)
- ・帰還への想い
- ・自宅(浪江)の状態に関する心配
- ・諦め
- ・将来への不安／不確定な状況

- ・対人関係の困難
- ・介護／看護
- ・住環境への不満(仮設、借上げ)
- ・自治会活動の困難・不満

- ・除染の効果に関する疑問／
放射線・原発への不安
- ・東京電力・行政への
不満・不信・怒り

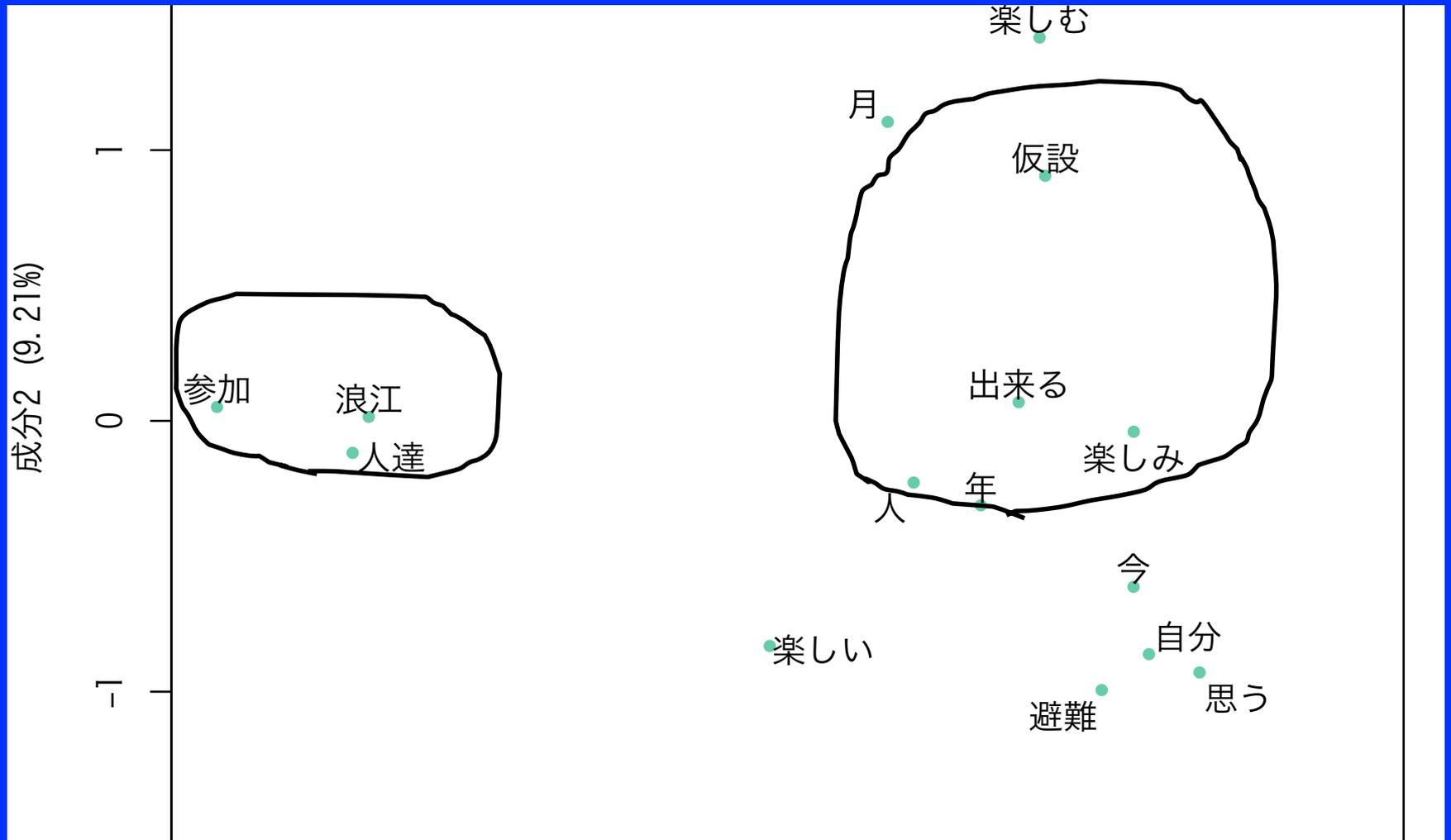
- ・賠償格差への不満
- ・賠償額への不満
- ・周囲の無理解・誤解／風化

喪失感の強さ

- 故郷への強い思い
- 帰りたいけど帰れない気持ち



楽しみ 不満 対応分析



調査をして感じたこと

- 精神的に不健康というのはあれだけのことがあり、現在も続いているのだから当然である。むしろ何が必要であるかを考えるべき。人と話がしたい(特に高齢者)という希望が多い。→被災者からはとにかく来てくれといわれる。
- 大変な状況の中でも楽しみを見いだそうとしている。前に進もうとしている。

二本松・浪江連携復興支援センター

- 商工会、商工会議所などを中心に「復興まちづくり」を目指す。
- 二本松市と浪江町の両NPO法人が連携・協力して中心となり、官民協働の復興事業の推進及び、交流イベント・見守り・宅配・乗合交通などの生活支援を住民参加型で展開して行くとともに、浪江町商業サービス事業の再開の推進事業、またそれと共に二本松中心市街地の活性化につなげる取組をしていく。
- 町外コミュニティ 構想
早稲田大学佐藤滋研究室の活動

インタビューの記録

- 復興曲線によるインタビュー
- 二本松など仮設住宅などで初期から活動している方にインタビュー



Tさん

- 大学3年生
- 浪江町出身 当時は大熊町の高校に通う(祖父母と一緒に)
- 当時はコンビニでアルバイトをしていた
- しばらく県内にいて のち東京のおばさんの所、次に静岡 そして秋田へ 両親はお父さんの郷里秋田へ
- 入学を1年延期 浪江には帰っていない
- 浪江には戻らないだろう

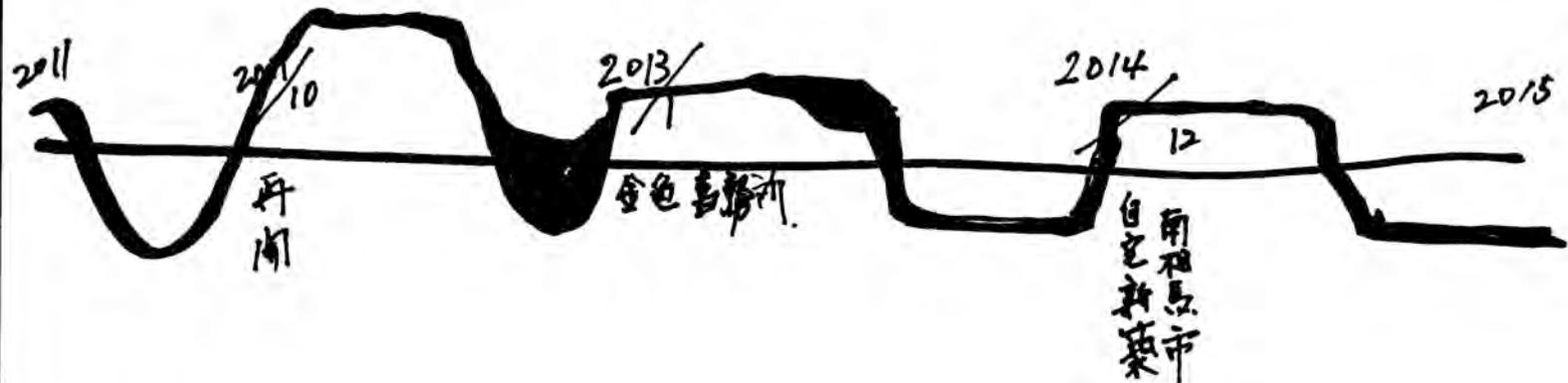
Hさん

- コーヒータイム 福祉事務所
- 住まいと心情が関連
- 震災後コーヒータイムが再開
- 手狭になり場所を探す。金色(かねいろ)に見つかる。
- 二本松在住の障害者の方とのトラブル
- 南相馬市に自宅再建 少しでも浪江の近くへ
- 震災後 帰還しようという気運のもとに会合に参加していたが、事実を知らされあまりの線量の高さに吐き気すら
- やはり帰れないんだという気持ち
- おりにつれ東電への恨みは でも皮肉を込めて原発のお陰という面もある

コーヒータイム



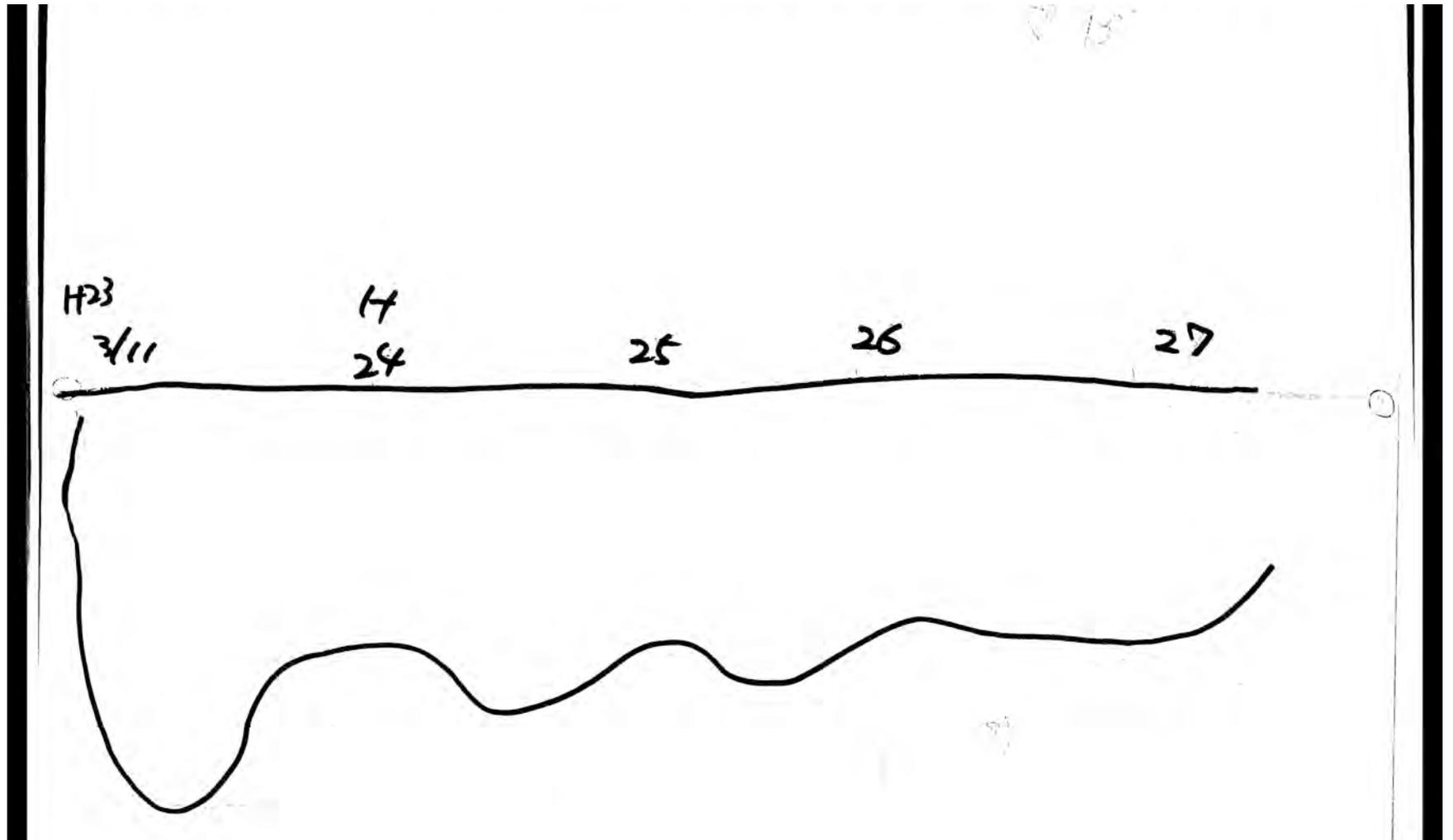
新たな事業の展開



NPOでの活動



仮のまち構想



Hさん

- 新町浪江
- 福島市に町外コミュニティの計画
- 何とか町長を説得したい 県外に行った人の受け皿に
- もともとは時計屋さんであるが メガネ、宝石、カメラ
- 90歳母親の話

- いわきは地価が上昇しているのと地元との関係がうまくいっていない

福島に町外拠点を 浪江の3団体が要望

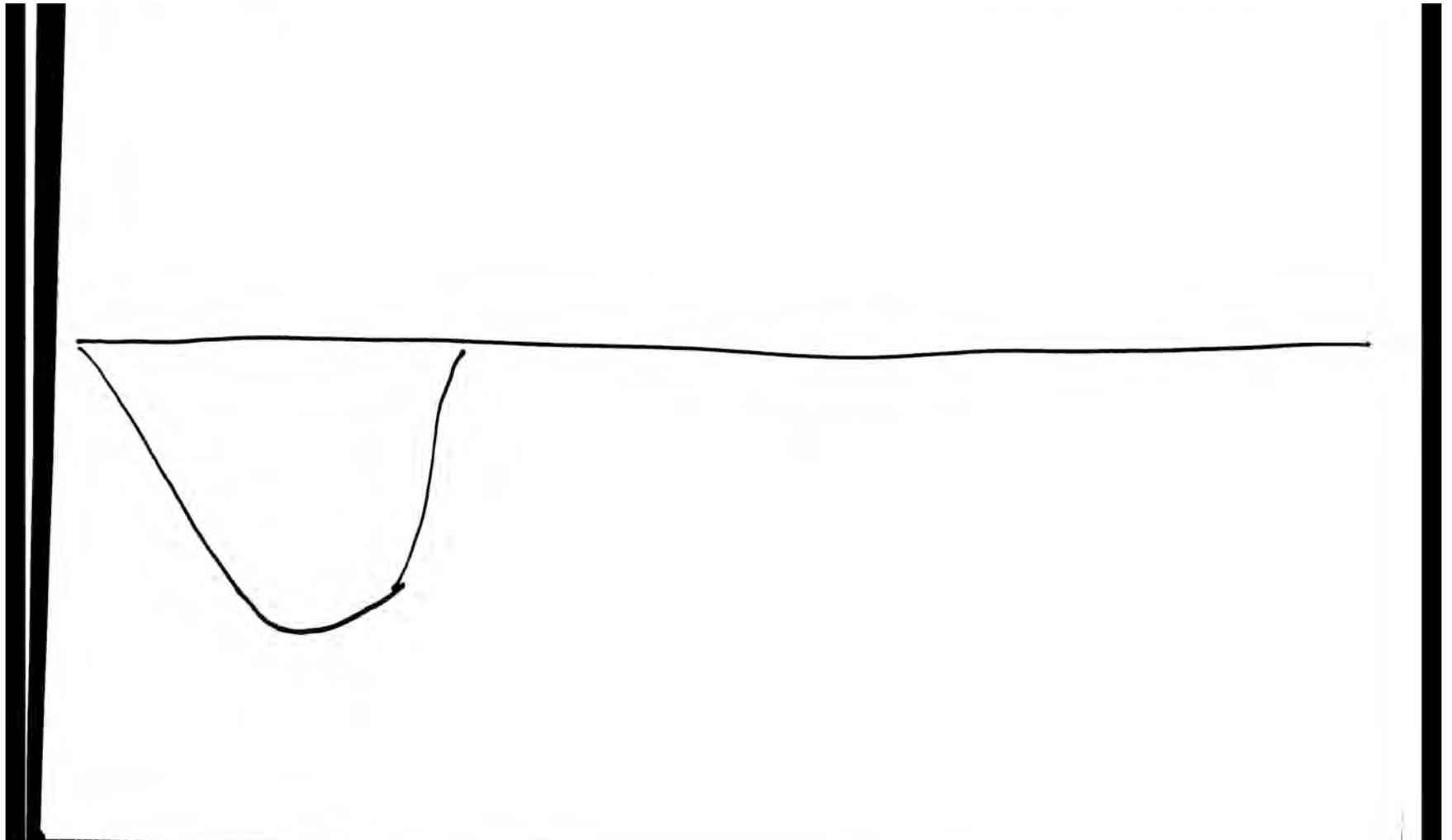
浪江町商工会、なみえ復興町づくり協会福島、まちづくりNPO新町なみえの3団体は福島市南沢又と同市八島田地区の農地約40ヘクタールに町外コミュニティーの整備を目指している。浪江町商工会の原田雄一会長ら3団体の関係者は4日、福島市役所を訪れ、小林香市長に要請書を手渡し、農地の市街地への転用に向けた協力を求めた。

3団体が協力してこれまでに策定した町外コミュニティー基本計画では、商業施設をはじめ、住宅、福祉施設などの建設を想定している。計画している場所は、JR福島駅から北西方向の3キロほどにある農地で、地権者117人は計画を了承しているという。

Sさん

- 大堀相馬焼
- 大堀焼きの保存に尽力 落ち込んでいる暇はない
- 幾世橋の住人で 南相馬に拠点
- 将来は戻りたい
- 物を作っていれば満足
- 町長に直接 線量の低いところから戻ればと提案

借り上げ安定趣味に没頭



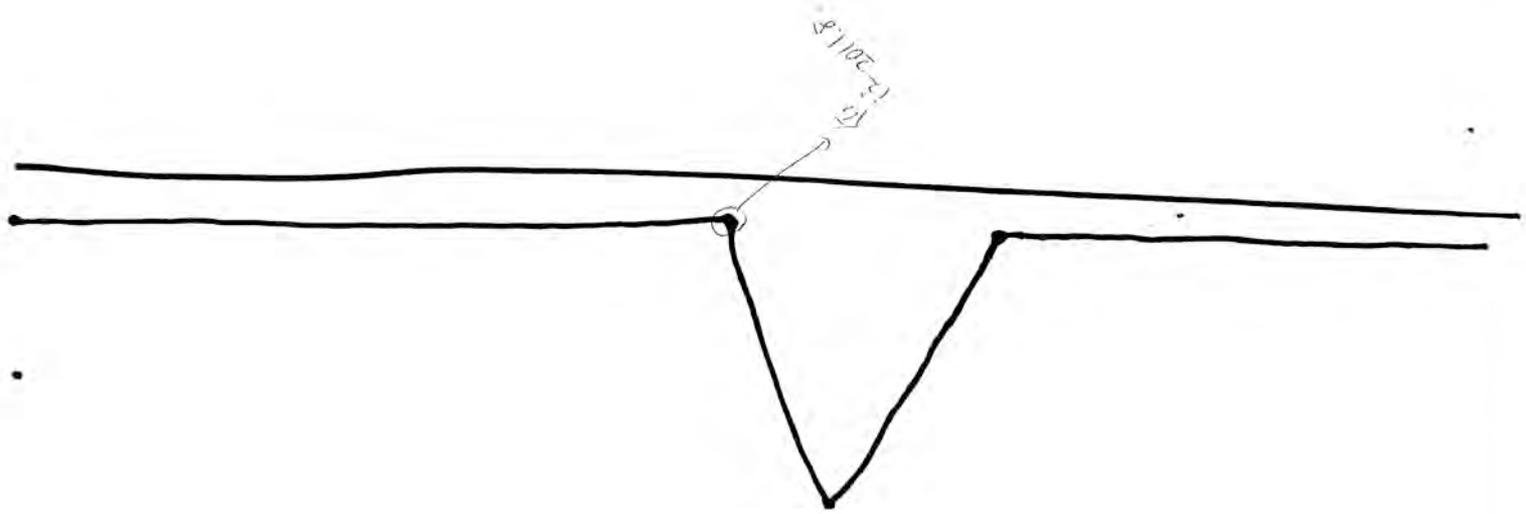
相馬仮設



相馬仮設の自動販売機



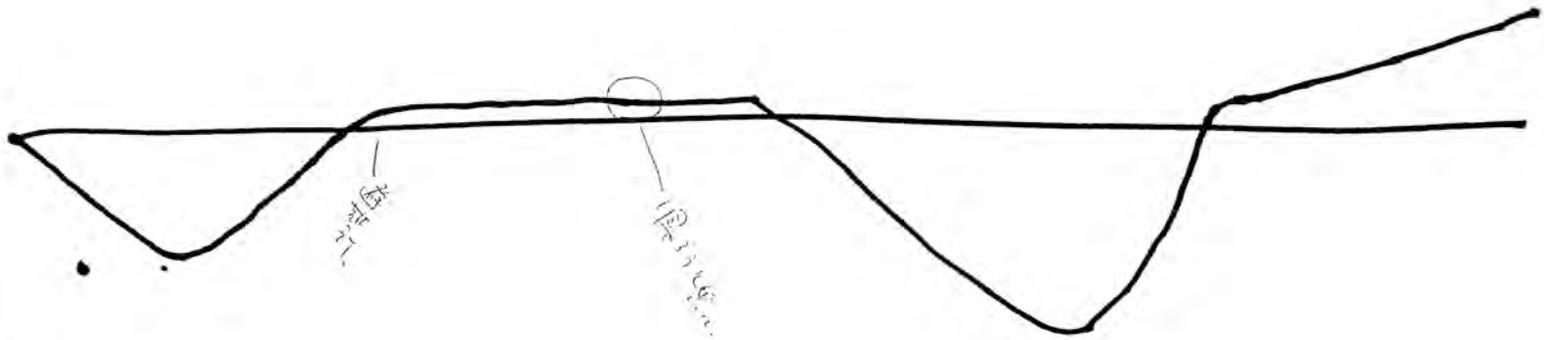
仮設安定 自力再建



Sさん

- 相馬仮設
- 立野の住人
- 郡山、磐梯山のホテルなどを転々 家族と一緒にだったので気持ち沈むことはなかった
- 出来るだけ浪江に近くということで相馬を選んだ
- その後父親が亡くなり、またご主人が原町へ単身赴任
- 母親と二人の生活となる 88歳なので周囲に迷惑をかけないか心配
- 南相馬に家を再建
- 金曜日夜にカラオケをやっている
- 忙しいと余計なことを考えなくてすむと思い副会長を引き受ける

夫婦最大の危機 帰還組



07/16

Kさん夫婦

- 相馬の仮設 色々な地域が 大野台第8仮設
- 叶谷さん夫婦 請戸に漁師さん 家は幾世橋
- 一家10人で次男の嫁の山形へ 町長あげて歓迎
- 親切にされればされるほど辛かった
- 夫婦だけで戻ろうと決意。浪江に近い相馬へ
- お酒を飲む量が増え、夫婦の危機
- 仮設の活動やカラオケ、そして周囲の支えで関係修復
- 帰還準備区域であるので帰りたい
- 相馬市の避難者がいなくなるとサービスが悪くなるのではと危惧

まとめ

- さまざまな被災体験を経験する中で、住居の安定が、こころの安定に繋がっている。しかし、地域コミュニティから分離した形で経過している人（例えば借り上げ）は必ずしも安定していない。むしろ、現在の住居は安定していないが、地域コミュニティを再興しようとしている人の方が安定している。これが地域、集団のレジリエンスとなっているし、今後もなるであろうと思われる